

ヘッセの個人主義（粗描）

Ich bin Individualist……

H. Hesse — Krieg und Frieden : Geleitwort

橘 好 一

ヘルマン・ヘッセは、一九〇四年「ペーター・カメンツイント」Peter Camenzind によって作家的生涯にはいり、「硝子玉遊戯」Glasperlenspiel（一九四三）によって一九四六年にノーベル賞を受けた。二十世紀前半は彼にとっては不幸な時代だった。この間に彼は二度の大戦を経験しなければならなかった。この二度の戦争は、ともに、人類にとって黙示録的な意味をもつ大惨禍をもたらしたが、その本質には明瞭な相違があると考えられる。要約すれば、第一大戦は、資本主義の自由競争によって帝国主義化した国家主義又は民族主義が権力の優位を求めて戦った戦いであり、其処には「弱肉強食」あるいは「強い者が勝つ」という現実主義又は自然主義的原理が働いていた。交戦国相互がどのような口実あるいは理念によって戦争を美化しようとも、本質は力の角逐であり、成上りのドイツの帝国主義的野望が先進資本主義諸国の協力の前に屈することと終ったと見えるのである。交戦諸国は「弱肉強食」という酷薄な自然主義的原理が、容赦もなく敗者の上に

のしかかって来、敗者に廻った国家及国民の未来は絶望的であるという怖れを均しく恐れたのである。果然、敗者は再び権力の優位をねらって隠忍し報復を準備する。かくて起った第二大戦が再び権力の優位をめぐる斗争であるかの観を呈したとしても、この戦においては、ただの力だけが勝ったのではなかった。ここでは力だけが勝つたのではなく、それはラディカルに精神の權威の勝利、個人の自由を守るための斗争の勝利だったのである。このことは、ヒトラーのナチスを中核とする世界のファシズムの野蛮な暴力に対して、フランスのレジスタンスを中心に世界に組織された抗争の倫理的意味を考えてみれば分ることである。「総力戦」によるヨーロッパ「新秩序」を揚言したナチスがヨーロッパにもたらしたものは、ゲシュタポと褐色の軍隊による未曾有の非人道的行為だった。総力戦とは掠奪、強姦、強盜、告発、処刑、虐殺、破壊、焼滅の別名であり、英雄主義的神話主義的な権力意志以外に精神的なものは全くなかったといつてよい。ユダヤ人を壁

虐殺し、大学の自治を窒息させ、学問芸術を御用化し、自由主義者社会主義者共產主義者を追放し、労働力を掠奪し、強制労働を課し、飢餓を造成し、そして劣悪ドイツ人に依るヨーロッパの規模のドイツ第三帝国を作る、というのが「新秩序」の意図するものだった。ナチのこういう蛮行は、国内は勿論すべての占領地区で行われたが、それが集中的に受とめられたのは就中フランスにおいてであつたろう。そして、軍隊による戦争に敗れたフランスの人民は勝者ナチスのインヒューマンな行為に對して起上った。パタンのヴィシー政権はナチスの傀儡となつて辛うじて第三共和国の命脈を保っていたが個々の人民はもはやかかる第三共和国の残骸に對してはいかなる信頼をもつないでいかなかった。抵抗の情熱とは、ナチ占領地区の灰燼のなから、人民個々の心にフェニックスのようによみがえつた解放と革命の情熱だった。それはナチスの蛮行とその協力者たちに對する正真正銘の人間の忿怒だった。彼らは個人の自由な生を守るといふ一点の真情において結集したのである。そして彼らは勝つた。フランスの抵抗精神に同調し、それを支持して戦つた世界の「抵抗」に、彼らは勝利のいと口をつけたのである。全世界の執拗な攻勢に端緒を与える事によつて、戦争に負けたフランスは抵抗において勝つたのである。彼らはアメリカの「戦力」によつてのみ對ナチス勝利を克ち得たのではないだろう。戦争の勝敗如何は終局的に人間の問題を解決しない。人間の問題を終局的に解決するのは「精神」の力であり倫理のはたらきである。非人間的なもの、人間悪というものに対する尽きせぬ倫理的エネルギーの盛り上りである。レジスタンスの成功によつて、何かがひとつ片づけられたという感じがのこる。それは、政治的権力の暴虐は人間の倫理的忿怒の前に遂に屈しなければならぬ、というかわらぬ人間の希望の

集的表現だったからではないだろうか。

ヘルマン・ヘッセも消極的にはあるが、一個の自由な世界的文学者としてこの「抵抗」に^{アンガージュ}関与していると言える。彼もまた個人の自由な生を大切にするという立場から帝国主義的ドイツの精神とナチスとを批判し、彼なりのそして当然の「抵抗」をしたのである。小論は主として二つの戦争に對するヘッセの反応の文脈を見ようとするものであるが、この反応を主としてヘッセの個人主義という観点から見て行くことにする。で、さしあたり、ここで、個人主義というものの概念をざつと規定して置きたい。

個人主義とは、いうまでもなく人間生活のすべての出発点に個人を置き生活の目標を個人に置く態度である。個人は社会や国家に優先するのである。つまり、個人の素質の充実な展開と福祉とを目的とし、他は一切この目的のための手段と見做す。「我」の自覚史の上からみればそれはルネサンスの人間觀にまで遡及しなければならないだろうが、今はその事は問わない。近代資本主義の基底にもそれは「*raison d'être, laisser aller* (自由放任)」の原理として存在し、次第に^{エゴイズム}利己主義に移行しつつ狭隘化しそれ自身の矛盾を露呈した歴史は考えられるが、これは個人主義のあらわれの一面を語るものでここに言う個人主義の真意とは異なる。個人主義は芸術家のエゴティスム(主我主義)とむしろ近いものであるが、通俗のエゴイズムとは本来無縁であると考えられる。個人主義は、他のインディヴィデュウムをも等しく尊重するという立場からは、むしろ社会主義と結びつく可能性の方が大きいのである。民主主義の基底には必ずこの個人主義の切実な自覚がなくてはならない。この意味で、国家主義偏重の資本主義的帝国主義の盛んだった十九世紀末から二十世紀前半の歴史は個人主義にとって苦しい

異常な時期だった訳である。では、ヘッセはそういう現実にとのように対処したか。

先にも述べたように、ヘッセは、トーマス・マンに遅れること二年、一八七七年七月ヴュルテンブルグのカルプ Kalw に生れ、英才をいだきながらも、マウルブロンマウルブロンの神学校を自ら進んで中途退学し、カルヴでの機械工やバーゼルでの書店の手代等を転々した後、一九〇四年「ペーター」——例のゴットフリート・ケラーの「緑のハインリッヒ」と無理なく較べられたりもするいわば「緑のペーター」——一作によって作家的生涯に這入った。雲や山、空間や風景をなぞる美しい観照と浪漫主義的な漂泊の心情とを盛り上げたこの作品には青春のほがらかな感傷的孤独感が纏綿して青年に愛好される作品である。そして、ここには、既に脱俗の志向があらわである。続いて一九〇六年に「車輪の下」Unterm Rad が世に出るが、この作品には折から次第に露骨になりつつあったライヒの *Konservative Revolution* のムードに対する反逆の気骨が色濃く反映しているのである。ここに言う「車輪」とは、作者ヘッセの少年時代を息苦しく色彩していた学校生活及社会生活の息づまるような個性庄殺の雰囲気のことである。プロイセンのドイツの教育及社会の背景には、軍国主義の史観がいかにめしく控えており、そこでは虚飾にみちた詩と冒険と陶酔とに色どられた英雄主義と「犠牲」の神話とがまことしやかに押しつけられたのである。一九一八年に第一次大戦後ヘッセが公にした「世界史」*Welgeschichte* と題する一文にはこの虚構の愚かさを見破った少年ヘッセの気持が語られている。「私は十五才で、はじめてこの見かけ倒しの光輝シメルリヒカイトが色褪せるのを見た。私は『昔は人々も民族も今のようではなかった。人々は日常尋常せいでいの生を生きていたのではなく犠牲と英雄的行為とに生きていたの

だ』といったたぐいの言葉に聞く耳を持たなくなった。私には私たちの先生が出来るだけ私たちに重荷を負わせ、私たちを意気銷沈にみちびこうとしているのが分った。彼らは彼ら自身の持たない徳を私たちに要求しているのだ。先生が私たちに教える世界史だってきつとそうだし、大人たちの作りごとにしたってそうだ。みんな私たちをさげすみ卑劣にしようとすることを目的にしているのだ、と分ったのだ」。

(「戦争と平和」1957) ヘッセが国家主義的で軍国主義的規律の精神にあき足らなかつた理由は彼の血統の上からも考えられることである。

トーマス・マンがいうすぐれたドイツ人に見られる *Überdeutschtum* の傾向はヘッセのばあい、彼の血統にも由来しているのである。彼の血統について、ヘッセは「シュワーベン人である祖父の隣りには、ロマン系 *Welsch* の祖母が坐って居り、かと思うと私たちの父はドイツ系ロシヤ人 *Deutschrusse* であり、子供たちの中の長子はイギリス生れでイギリス人であり、次子はシュワーベンで教育を受けさせられたのでヴュルテンブルク籍をもつて居り、そして残る私たちは、父がバーゼル在職中、いわばそこに『買いとられて』いたのでバーゼ尔市民といった次第でした。」(1918) と「アデーレへの手紙」にのべてをり、そのような訳で彼の家庭には「国家的又は国粹主義的な雰囲気は殆どなかった」ことを回想しているのである。有ったのは、むしろ、四海平等観による宗教的人間愛と魂の静謐を求めるアタクシヤ(心の平静)探求的な求道の精神だったと思われる。これは父系の代々有能な伝導家であつた事実を考えれば無理なく理解出来ることである。この頃のヘッセは、彼の氣にそぐわない外部の現実から自由に遊離して、自己の個性の真実のうごくまに、自我への道を求めつつ生きようと言う態度をとり、そういう事を手軽に可能だと思つていた

ようである。このようにして、ヘッセは早くからドイツの国家主義の厳格な要請に背を向けて、いわば一人のやや逃避的なコスモポリテース(世界市民)的立場を漠然と取っていたのだ。第一大戦がはじまるや、しかし、ヘッセのこういう立場はそのままで存立し得ないことが分ってくる。政治の厳しさがそういう生活を次第に追いつめてゆくのである。ヘッセは外部の現実に対して少しづつ積極的な批判的態度を取らざるを得なくなるが、これについては、「戦争と平和」の序文の中でこう告白している。「私は政治への道程を大変おくれで、間もなく四十才に手のとどく人になって、はじめて歩み出したのである。身の毛もよ立つような戦争の現実を目撃させられゆくり起されて私たちの同僚や友人たちが手もなく半牛火神に身を委ねて行く軽率さに深い嫌悪を感じながら……」と。こうして、彼は第一大戦の戦中戦後を通じて、一九一四年以来、中立国スイスの「チュリヒ新報」*Neue Zürcher Zeitung*に、戦争について、又ドイツ及ドイツ人について、彼の見解を発表しつづける。トーマス・マンがドイツ人としてドイツ人の内面に立ち入り自己の中のドイツ人を取り出して反語的に批判してみせるといった姿勢のもとに、自己の良心につきささって来る「疑念の棘」をエロティシエ・イロニーに托して、いわば演技的に表明しつづけたのにくらべると、ヘッセは、正面切つて自らの所信を表明して行つたようだ。ドイツ国内ではおそらく絶対に許されなかった事を彼は中立国の新聞によってやってのけたのである。その第一着手が、開戦の年つまり一九一四年十二月の「おおよよ、こんな騒ぎは真平だ!」*O Freunde, nicht diese Töne!*である。ここで彼が直接に話しかけているのは、「国境界標のところで世界が終っている」ような人々に対してではない。それは、従来人類全体のために仕事を

し、超国家的な人類理念の確存を信ずるかに装っているが、こういう理念が現実と直面して影うすく不利なものに見えはじめるや、突然「隣人」たちと同じ言葉で語り彼らの耳に耳ざわりのよい歌をうたいはじめ、戦争を精神的に正当化するような立場に廻った指導的な人々、つまりそういう詩人、芸術家、学者、ジャーナリストたちに対するものだった。彼の訴えは、人間社会の良心であるべき知識人たちの、戦時心理に基く数々の愚行一般に対し直接に向けられたのであり、彼の政治への関心を喚起したロマン・ロランと等しく *au dessous de la mêlée* (紛乱を超えて)をその立場としていたのであり、それはまたマンの言う *Marette des Hasses* への警告でもあった。ここでも、彼はコスモポリテースの立場に立つて、個人の自由な生が戦争という政治的現実によって疎外される悲しみを訴えているのである。彼もまたトーマス・マンと等しく、生に対する「よき意志」のドイツ人の模範をゲーテに見ることを表明した。そして地上の平和へのよき意志を持った人々の友情は、最高の理想であることを止めぬであろう、とうたえた。ここでは、ヘッセの個人主義は一貫して反戦主義となり平和主義となつて表れているのを見ることが出来るのである。それがもつとラディカールにあらわれたのが一九一七年十二月、予想され準備されつあつた西部戦線の決戦と大殺戮を前にしての呼びかけである。彼は万人の胸の奥に生きているであろう平和への希い——潜在平和をよび出すべく人々に次のように呼びかけるのである。「平和はあるのだ。それは思想として、希いとして、提案として、ひそかに動いている力として、すべての陣営に、すべての人びとの心の中にあるのだ!人びとめいめいが平和に対して卒直に心を開き、平和を助けるといふ堅い決意をもち、自己の考えと自己の予感との担い手であり、実行者であ

ることを決意するならば——いま個々の善意の人びとが、ほんのしばらく、平和への意志がどんな妨害にも、どんな絶縁層にも、どんな障礙にもぶつからないように協力することの外は一切考えないならば、われわれは平和を手に入れるであらう。」(ibid: 80) 「時は鳴った! いまは一つの些細な屈辱、一つの譲歩、そして一片の人間性の發揮はもはや吾われの恥辱とはなり得ないのだ!!」すでに、一九一七年十月ロシヤの人民はツアーの権力に対して起ちあがり、東部戦線では休戦と平和が成立していた。これに対しヘッセは、「弱き者が最も強き者であり得る」という古き聖なる教訓の具現であるとしてこれに讃辞を送っているのである。これは当時としては大胆な発言だった。しかし第一大戦にのぞんでドイツの軍部、官僚、その他の知識人たちが口々に叫んだところの、ドイツにとつての「偉大な時」は、ヘッセにとつてはただの空騒ぎのお題目にすぎなかったのである。ヘッセの個人主義は外部の声を信じなかった。彼の「内部でキリスト者が『内省』Einkkehrと呼び、精神分析学者が『内向』Introversionと呼んでいるものがはじまった」のは古い。(ibid: 80) 彼は「宗教的人間と詩人とはそれが必然的であり、新しい官僚的指導者が『歴史的思考』と称しているものなどは、たとえ自ら買つて出でどんなに努力してみても金輪際納得出来るものでないことが分つていた」(ibid: 80) ところが、「偉大な時」というドイツのスローガンに肩をすくめた詩人アウトサイダー、狂った倨傲と恐るべき無分別とに警告した宗教的人間たちは、いわゆる『詩人』として世間の物笑いの種になるよりも、今やもっとひどい状態に陥つた。彼らは祖国の敵であり、敗北主義者であり、一切の新造語によつて出来るだけ悪しざまに呼ばれる人間となつたのである。ヘッセはよくこの苦渋に耐えた。一方プロイセン的ドイツの「歴史主義は」

は、人類の生活史の中からそれ自身「普遍」である理性をしめ出して、今こそ「歴史」は彼らの手により、力によつて作られる事を自負し妄想したのである。つまり、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての自然科学の驚異的な発達と資本主義の繁栄は幽暗な覇者の夢をドイツに夢みさせつづける。ドイツはもっぱら軍部官僚および国民の古風な英雄主義によつて担われ、武力行使による局面の一挙解決という斜面をすべりつづけた。そして西部戦線に決戦を求めたドイツは、ロイド・ジョージおよびウィルソンの意志と当時の連合軍の新兵器であつた戦車の前に脆くも屈し覇者の夢は破れ去り、ドイツの妄想は破れた。かくしてドイツはワイマル体制下に混乱の時期を迎える。この時以来、ヘッセの思索はドイツの心性への究明と新しい道への模索のために費されるかに見える。彼は、自己の内面の体験による確信に立つてドイツに語りかけるのである。

ワイマル体制——ドイツ第一共和国は「余りにもおくれでドイツに訪れた民主化の試み」だった。進歩、保守、反動とさまざまなイデオロギーの混乱から起るいくたの政治的危機と賠償問題にからむ経済的危局とを胚みながらドイツ民主化はともかくも進められて行かざるを得ない。ところで、この時ヘッセが憂えたのは、何よりも先ずドイツ人のエートスの革命、ひいては人間革命の成否の問題だつたと思われる。彼には *Wie* が問題なのであつて *Was* がそれなのではなかつた。「吾われは、ただ魂の内部で起ることだけを『偉大』とするのである。カイザー信仰からデモクラシーへの転向はただの旗替えにすぎぬ」(ibid: 83) と彼は言っている。彼はドイツ人の意識の基底に、いわば、新しき人間の覚醒を求めて、ドイツの青年たちに語りかけるのだ。一九一九年の「ツァラトゥストラの再来——ドイツ青年に与える

言葉」がそれである。

「ツァラトウストラの再来」は、Ich への道を示した作品であるが、これを理解するには、同じ一九一九年の『Eigensinn』(我意)という文章を読むのが早道かも知れない。「我意」の中では、官僚と軍隊とによって成立していた軍国主義的ドイツ人一般のエートスは次のように指摘されている。すなわち彼らには民族が一切であって個人は無であるという教義。カイザーと下士官が神であって、強固なる組織と上から与えられた秩序が一切であったドイツ。集団の中にあり集団と共に死んで行く方がましであるとしたドイツ人たち、「服従」ということに余りにも慣れて来たドイツ人たち、「服従」によって命令が遂行され指令が実行されることに満足を感じないでは一步たりとも動こうとはしなかったが故に、まるで大地が森で蔽われでもするように命令書や指令によって国土が蔽われてしまった国ドイツ、常に集団をたより集団の中に出かけて行き、いわば「同族畜群の温かさ」を求めやまぬドイツ人。ヘッセは、当時のドイツ人のエートスをこのように見、いわば存在の無垢性、つまり真の原初的な Ich に悟達した経験の人たちないに對して Eigensinn の意義を説くのである。

「地上の万物はみな一つの『個有の心』 einen eigenen Sinn を持っている。一つの石、一本の草、一茎の花、一基の灌木をして一足の獣、それらは夫々もつばらそれらのもつ『個有の心』に従って成長し生き行動し且つ感じています。そして世界が立派で豊けく美しいのはそのためなのです。花と果実とがあり、櫛の木と白樺の樹とがあり、馬と鶏とがあり、錫と鉄とがあり、金と石炭とがあるということ、これは専ら万有のなかの極小のものが、その心 Sinn、つまり自己の内部にもつてゐるところの、完全にゆるぎなく惑わしなき自己個有の法

則に従うことから生れて来るのです。」(ibid.100—101) 「『我意』と

は服従なのです。」かくのごとく、むしろアナキーなまでの存在個性の強調と伝承の美德における価値転換、古きドイツをその深き根底において新しきドイツに媒介するものこそ、かかるラディカルな信念でなければならなかったかもしれない。彼は姦されるとも知らずにあり合せの既成エートスに縛りついてゆき、現実のなかにただ流されてゆく人たち、いわばはじめから自己の存在の無垢性を喪失している者たちに向つて語る。「ところが、世間で愛好されたいにもてはやされている徳とは、人間の作り出した掟に服従することなのです。ただ、『我意』だけがこういう掟を問題にしない。我意の人は、もっとほかの掟、ただ一つの絶対に聖なる掟、つまり自らの内部の掟、自己の心 Sinn に服従するのです」(ibid.99) 「おのぞみならば、エゴイズムと言つてもいい」(ibid.104) かくて、ヘッセのパスpekティブにおいて、いわば人一切のものの価値の転換Vがはじまる。永く、絶対のもののように支配権をふるつていた固定観念が王座からひきおろされる。たとえばドイツ人にいたく愛好された「英雄」の概念がかわる。戦場において多くの苦難に耐え、異常の勲功を立てることで命を落した兵士が英雄でないのは、辛うじて兵士たることに耐え、日頃将校たちに犬のように怒鳴られ、たまたま一発の敵弾に当ることによつて「英雄」となった兵士が英雄でないのと同じである。『自己固有の』、高貴でありのままなる我意を自己の運命とした人だけが英雄なのであり……自己の運命に勇氣を見出す者だけが英雄なのである。」(ibid.108) そして金銭や権力もまた色褪せる。「私のいうあの我意の人は、金銭や権力を求めない。我意の人が金銭や権力を蔑視するのは、彼が所謂自称徳行家で利他主義者 Altruist だからではない——

正反対である。人間は金銭などの為に互に苦しみ合い果ては銃をとって殺し合いさえするが、自己自身に達した人つまり我意の人には、そんなものは殆ど無価値なのだ。」「金銭と権力とは不信の生み出した発明なのだ」(ibid.S.105) このように「人がひとたびこの徳(つまり我意―筆者)を認識し、そのいくぶんかを自己の内部に発見するならば、いままで最上とされていた諸徳がひどく疑わしいものになるのである。愛国心もその一つである……。敵を射殺する兵士は、自己の耕地を美事に耕作する農夫よりも本来偉大な愛国者であると考えられるのが普通である。嗤うべき事に、吾われの面倒なモラルでは、自らをしあわせにし、自ら益する人のもつところのその徳が間違っているとされるのである。」(ibid.S.106)「国民経済的立場」だってそうだ。戦前、国民経済学的立場からは、戦争は起らないし又起っても長くは続かないと教えられたが、その反対の事実が出来た。すべてこういう「立場」とは物を見るための眼鏡であって価値のないものである。「人間にとっては唯一つの天然自然の『立場』天然自然の尺度があるだけである。我意の人が持つ尺度である。我意の人に取っては、資本主義の運命も社会主義のそれもなく、イギリスもアメリカもない。彼にとっては、ただ自己の胸の中に生きている物言わぬ法則以外のものは一切生命を持たぬのである。この法則に従うことは、今までぬくぬくと伝習によって生きて来た者にははかり知れぬほど困難なことだが、我意の人にとっては、それは運命と神性とを意味するのだ。」(ibid.S.107)

以上のべてきたような教説は、容易に東洋の諦観や解脱の境地に通じて居り、吾々のテムペラメントが親近の感を抱くところのものが、ここではヘッセの中の「東洋」をのぞいてみる事に興味があるの

ではない。吾々の関心はやはりドイツの「戦後」の現実に向けられる。そして、それに対して取られたヘッセの態度に向けられるのである。

ヘッセは戦後処理の問題に関して、特定の政党や党派によびかけはしなかった。問題はそれ以前にあったのである。つまり人間の未来の幸福を約束する主義や綱領よりも、人間自体の方に問題があったのだ。主義や綱領が便法として生じられる前に、そしてそれによる戦いと混乱とが招かれる前に、自我を大切にし自我を問い、そして生を劬り守ることが総てに優先することを彼は言いたかったのである。「ツアストウラの再来」は、こういう自己の生の肯定、尊重、愛という立場から語られる。「今しも、この、常ならぬ時に世界改善の歌は再び激しく吠えるがごとくに唱われている。それらが如何に悪しく酔いどれた歌であるか、諸君にはそれが聞えないか？これらの歌声の何と思いやりなく nicht nur、何と愚鈍に智慧なく響くことか！この歌は、あたかも額縁のごとくいかなる絵にも相応しいのだ！それはカイザーのまわりにもふさわしかった。警察官にもお似合いだった。それは君たちの著名な教授たち、ツアストウラの昔の友人たちを囲むにもふさわしかった。この無粋な歌は、民主主義にも社会主義にも、国際連盟と世界平和にも、国家主義にも、そうして新民族主義にもふさわしいのだ！それは一者が他者に反対する時唱われる。一者が他者を唱い黙らせようとするとき、君たちに対し、君たちの敵によって、声を合せて唱われるのだ！君たちは気がつかないか——この歌の唱和されるところなべてに、ポケットの中で拳が固められているのを！そのとき問題なのは、自己の利益であり、我慾であり——残念ながら、自らを高め、自らを鋼鉄のごとく鍛えようとするあの高貴な個我主義

は問題でなく、専ら金と金袋、虚栄と自負とが問題なのであることに。人は自らの利己主義を恥じるとき、世界改善のことを語りはじめ、この言葉を陰れ簑として使うのだ」「友よ、私は、かつて世界が改善されたことがあるか、世界はつねに、そして永遠によきものであり同時に悪しきものであったかどうかは知らぬ。私は知らぬ、私は哲学者ではないのだから。……しかし、私は知っている。——世界が曾て人間によって改善され、人間によって豊かにされたためしがあつたとすれば、(つまり)世界が人間によって以前にもまして命ゆたかく喜びにみち、危険にも愉しきものにされたためしがあつたとすれば、それは絶対に改善論者流の手によつたのではなく、私の好んで諸君に語るあの真に自我を追求する人の手によつたのであることを。率直且着実に自我を追求する人——彼らはいかなる目標をも知らず、いかなる目標も持たずに、ただ生きて自らであることで足りるのだ……」(ibid. S. 136—137)

つまり、民主主義はお題目ではないし、戦敗国の自己保全のための単なる便法でもない。自己が自己であるような生き方が可能になることと自体が人間本来の希求なのである。当時における「今日の問題」は、これが先ず人々の明かな自覚になることだった。それを民主主義とも、その他何々主義とも名づけるのは勝手である。すべての基底に、自我の尊重と生への愛と平和への絶えざる希求とがなければならぬのである。それは過去の軌跡の一切を無に返して、そこから生きはじめることだった。ドイツ人の他律的被動的エートスに取つては、何よりもこの自覚が、いや自己革命が、必要だった。個の自覚と個の生へのいとおしみのないところに真のデモクラシーは育たないのである。ヘッセは、孤独と受苦とを運命とし深く是認しつつ真に自己の生活を

凝視し生を愛するという立場を語つたのである。

ところでヘッセはワイマル体制そのものについては、決して無関心な反政治主義者であつたのではない。むしろワイマル体制という形式こそはドイツ人にとってそれが真の内実を伴うとき、つまりドイツ人の質の転換を伴うとき正に一つの「革命」となり得るような新しい可能性であつたが故にこそ非政治的に、以上の言葉を語つたのである。

彼がワイマル体制について、どのような考えを持っていたかは、第二次戦後に書かれた「アデーレへの手紙」に書かれている。『いいたい何故に人々は一九三三年以後になつてやつとヒトラーを発見したのか。ミュンヘン暴動の際人びとは彼の正体を究明しておくべきではなかつたのか。第一次戦後のただ一つの喜ぶべき果実(圈点筆者)であるワイマル共和国を人々はいったい何故にはぐくむことをせず、それを育成することをサボってしまったのか。そして異口同音にヒンデンブルグに、そして次にヒトラーに投票してしまつたのか。』つまりヘッセにとつても、ワイマル共和国は戦争の「ただ一つの喜ぶべき果実」だったのである。しかし、ヘッセがあれほどにこいねがった人間革命はドイツに一般化しなかつた。人々は過去の重荷を捨て切れなかつた。あらゆる意味で、人々の大がいは「歴史的思考」のなかにあり、現実によつてふり廻された。ヒトラーは、この事情のもとで形式的デモクラシーを道具として最悪の保守革命 *Konservative Revolution* を完成した。つまりトーマス・マンの言う精神的無の、最悪の革命がドイツに完成したのである。ヘッセが「第一次大戦後吾々の指導者の国家主義的諸理想が一つの妄想だつた事が分つたのだから——ましな方の道は、人間性であり、理性であり、善意というものではないのか」(ibid. S. 94—95) といったにもかかわらず、国家社会主義労働党という奇怪な集団が再

びドイツの国家を牛耳ったのである。

ヘッセは一九二三年にドイツの国籍を放棄して正式にスイスの市民となる。ヒトラーが政権を握る十年前にドイツ人一般の度し難さに愛憎を尽かしてしまったのである。彼が住みついていたのはテッシン州の一寒村モンタニョラだった。これはいかにも静寂を愛するヘッセに似つかわしかったが、ヘッセはこの日当りのよいパラダイスにあって *Leckerlifresser* として好日月をたのしむことを許されたのではなかった。彼は「アデーレへの手紙」（一九四六）の中で書いている。

「こパのラダイスに住んでいる私たちも戦争中は、毎日のように、あの褐色の悪魔たちの来訪を予期していなければならなかったのです。私たちのパラダイスでも、私たちブラックリストにのっている連中を投獄や絞首刑がつけねらっていたのです。ともあれヨーロッパ新秩序の発案者たちが、たえず私たち黒き羊たちに好餌をもって誘いかけて来たことを言っておきましょう。そういう訳で、戦争も大分末期に近づいた頃、ある著名なコラボラツィオンの一員によって、私を、ローゼンベルクがはじめたヨーロッパ協力同盟に加盟させる為に、費用はもつからチューリッヒへ話し合いに出かけて来ないか、という招請を受けたことがあったのです。」（*ibid.* S.199）*Der Bund der europäischen Kollaboration* とは、ヒトラーの「新秩序」という神話をドイツ及ナチス占領地域に強制する仕事に協力する使命をおしつけられた腰の弱い知識人の集団である。いずれも社会的影響力をもつ人物だが、彼らは強大な既成事実を前にして、人間の人間としての権利や「理性」といった普遍的なものへの情熱を見失った人たちである。ヘッセは勿論かかる誘いには応じなかった。ヒトラー一党によって、その著作のすべてを禁書にされ、ユダヤ人である彼の妻の縁辺及自己の友

人たちを殺されあるいは投獄されたヘッセが、今更 *Kollaborateur* となつてはすべき協力をするはずもないのだが、それだけでなく彼の腰骨のすわった確乎たる個人主義はかかる協力を絶対に肯んじなかったのだろう。

ところでNS時代に「ナチスの御用文学」つまり *Blut und Bodenschrittum* に抗したドイツ文学のあり方をフェヒターは次のように言っている。「これら一切のもの、すなわち長く海外に知られた著名作家たちに対する執筆禁止、焚書、国家権力による非謗も甲斐なき企てであり、それは地下に流れているものの息の根をとめることは出来なかった。ひとたび動き出したものはうごきつけ、ほとばしり出ようとするものは、陰然公然に、秘密に、あるいはかくれ簍をつけ、流謫の中に、国外亡命派又は国内亡命派の中で発芽しつつ出口をきりひらいていった。」（*P. Fechter: Geschichte der deutschen Literatur* S.363）NS時代のドイツ文学の主流と名譽は「ナチスの *Schein-Literatur* に参加しなかった人つまり *innere Emigration* の人々や、モスクワやアメリカ、その他国外にあった人々つまり *äußere Emigration* の人々によって担われたのだが、ヘッセもまたこの時代の中でさしあたり *äußere Emigranten* の中に数えることが出来るだろう。彼もまた、もう一つの本当のドイツ文学を担う人々が言語に絶する困難の中で書いたのに並行していわば *untergründig* に書いていたのである。彼は「戦争と平和」の序文で、「私の生涯の作品全体を理解する人は、私がアクチュアルな問題について一つも論文を発表していない年々においても、足もとにちらちら燃えている地獄の思想、破局と戦争との危惧の念が瞬時も私を離れなかったことを知るだろう。なかなか明日に迫った戦争を前にしての不安にみちた警告でありながら世

の叱責を受け且つ一笑に附されてしまった『荒野の狼』Steppenwolf (1927) から『硝子玉遊戯』における「一見時代離れし、現実離れした幻想世界にいたるまでにおいて読者は始終それに遭遇するだろう」(ibid. S10)と書いている。ヘッセにあっては、すべてが、平和への愉悅と祈りと警告であった。第二大戦もドイツナチズムの敗北に終った。そしてヘッセの前にいまや二度も過誤を繰返したドイツ人が立っている。そのドイツ人に向ってヘッセはきびしく言う。「多くの事情は第一大戦の時とは違って居りません。(中略)今日私のすべての友人たちの中にヒトラーの処刑について反対する者がいないのと同じく、人々はそのドイツ共和国の設立について、軍国主義戦争と暴力との断罪について反対する者はありませんでした。人びとは、ひとしく私たち反戦論者たちと兄弟のよしみを結びそれが次第に心底からのものとなりました。ガンジーとロランとが、まるで聖者のように尊敬されました。『再び戦争をくり繰すな』がスローガンになっていました。しかし数年を出ない裡にヒトラーがミュンヘン暴動という暴挙に出ることが出来たのです。だからこそ、私はヒトラー断罪について口を一つにしている今日の状況を真面目に受取らないのです。(中略)けれども私は、あのとほうもない苦難のなかで、この数年来の灼け爛れる殉難ごうもののなかで、内面への道に向って、つまり世界の核心への道に向って心がひらけ、永遠の現実を目をひらいた人びとの思想の変革だけは真面目に受とります。このような目ざめた人びとは、私が一九一四年以後に経験したのと等しく大いなる秘蹟 das große Geheimnis を嗅ぎつけるという体験をされたのです。うたがいのもなく、それはもっぱら前よりも一層大きな重圧と苦悩のものになされたのですけれど。」(ibid. S. 202—203) はかり難きは人の心というものであろうか。

ヘッセの個人主義(橘 好 一)

そして、恐るべきは、第一大戦の惨禍が人々の心のなかに定着もせずにあとかたもなく消え喪せてしまったことであろう。結果として、ドイツは再び精神なき「指導者」の狂的な妄想によって「指導され」てしまったのである。ドイツの革命は、革命の名に値しない超保守的反動の革命だった。そしてそれは人強制されたV秩序への努力という美德をもって破壊に奉仕するためのものだった。それは世界史における「ドイツの悲惨」を一層悲惨にするものだった。ヘッセならば言うであろう、人間革命なき革命は革命ではない、と。まさに彼はそれを言うてきたのである。ワイマル共和国の「与えられた革命」を完成するのは、その体制の中で行われるべき人間革命つまり意識の革命としての人間の質の革命によるのでなければならなかった。ヒトラーを「指導者」に選んだドイツ人の理由とはいったらどんなものだったのか。「畜群の中にいることの温かさ」そして「服従」の美德——ただそれだけだったのだろうか。ヘッセは孤独な受苦と運命の肯定を教えた。孤独な受苦と運命の肯定というけわしい道によって得られる生の肯定と自由の歓喜とおしえた。そしてそれは虚しかったのである。

集団の中に存在し、集団のなかに埋没したまま死んで行く人間——それだけが人間の生きる途だろうか。人間は集団の中に生き集団の温かさのなかに死んで行くがごとく見える時も、遂にバラバラに死んでゆくのである。人は人に対して「狼」であるかぎり、そして徒党が他の徒党に対して敵であるかぎり、「万人に対する万人の戦」はいつまでも存在するだろう。「徒党」はあらゆる形で存在しつづけ、さまざま、色彩を異にする「畜群の温かさ」がたよりにされるだろう。人間が「人間」と「自己」とに到る道は遠い。「人間の馴致、つまりゴリラから文明の動物に到る人間の発展は長い長い道程だった。道徳お

よび法に定めてある成果はあやしげなものであり、あらゆる機会に牙をむき出しにしたアタヴィスムスが白日の中に現われ一見永久に身についたかに見える成果を再び無力なものにしてしまう。」(Ibid. 156) とヘッセは「汝殺す勿れ」の中に書く。「吾々はまだ人間にはなっていない、人間への途上にあるのだ」とも書いている。

「個人」の絶対性に対する信仰が普遍化され、「個人」の生の絶対性が道徳的理念の頂点に据えられねばならぬ。それが絶対的道徳的公準にならねばならぬのだ。「自らが自らに成る」ために、生命を惜しみ、それを何ものの犠牲にすることを肯んじないのは、女々しいことであり非英雄的なことであろうか。人間があらゆる「畜群の温かさ」への本能を断念し、バラバラの個人となつて、一回限りの自らの生成の意義に立ちかえり、生の侵害と浪費とをおし、この自覚を普遍化し、あらゆる時に他個を犯すということの前に立止つて考えてみることは出来ない相談なのか。人はバラバラに死んで無に帰して行くのである。いかなる「徒党」も、いかなる「畜群の温かさ」もバラバラに生れそして死んでゆく個人を如何ともする事は出来ない。バラバラの個人がバラバラに受苦し個々の生成と運命とを担つて死んで行くが故に、自らの、そして他個の一回限りの生への愛惜において、その諦観の絆によつて人々は高き境位で再び結ばれ合えないものか。「そして常にくりかえし、私たち未来の信奉者たちはあの古き要請『汝殺すべからず』を提起しつづける。(中略)何故ならば、この要請こそ進歩の基本的要請であり、人間となることのための基本的要請だからである。吾々は余りに殺しすぎる。おろかな戦争、愚にもつかぬ革命の市街戦、暗愚なる死刑執行においてわれわれは歩毎に殺しを行っているのである。われわれは有能な若者たちをやむなく彼らの本来の性(しよ)に合

わない職業に送りこむことによって、殺しをする。われわれは貧困を、欠乏を、汚辱を見て見ぬふりをすることによって、殺しをする。

(中略)徹底した社会主義者にとっては、私有財産が盗みであるように、われわれ徹底した信仰家にとつては、生命を無視すること、あらゆる苛酷さ、あらゆる冷淡、あらゆる蔑視は殺し以外の何者でもない。

(中略)いたるところに生が待ちうけている。いたるところに未来が咲き誇っている。しかも吾われはそれを理解せず、その多くを足下に踏みこむ。 (中略)しかし、吾われのめいめいは人間性 Menschheit に関して唯一つの課題を持つだけである。(中略)人間としての吾われの課題は、吾われ個々の一回きりの個人の生において、野獸から人間へもう、一步を進めることである。」(Ibid. 157) けれど、これが、人間革命としての「Ich にかえれ」いや、むしろ「生」にかえれ」をよびかけるヘッセの真意であつた。現実を無、および未来から見ることが忘れた理想なき現実派は青褪めねばならぬ。ヘッセの、悪しきドイツに対する、そして戦争に対する孤独な怒りは、一貫して、個の保全と成生とを目的とする理想主義的な彼の人間性に発する道徳的感情、彼の浪漫主義に立つものだった。「ともかく私はゲーテがドイツ人について言つた言葉をほほえましく思い出し、彼が私の同時代人であるなら、二つの大きな時代病、すなわち今日の状況をかくあらしめているところの技術誇大妄想と国家妄想という二つの精神病に対する私の診断にたちまち横合から賛意を表してくれるだろうことを屢々思ひます。その二つが今日の世界にその相貌と自意識とを与えているのです。それらは私たちに二度の世界大戦とその結果とを与えました。そしてこの疾患が静まるまでには更に多くの似たような結果を实らせるでしょう。この二つの世界的疾患に抵抗することが、今日地上の精神

にとつて最も重要な課題であり正当権なのです。私の生涯は大きな潮流の中のささやかな一波としてこの抵抗のために捧げられたのです。」(ibid. S.201—211)

けだし、ヘッセの思考にあつては、個人は、そして個人の生は一切に優先するのである。国家があつて次に個人があるのではない。人は国家の中に生れて来るのであつても、同時にまた彼は世界の中の個人として生れて来るのである。国家は個や部族の生存のための必要が生み出した便法である。人間の悲しき属性によつて個人をつくる本能的利己的集団があつたから、国家や民族が次第に意識化され、必要化され、強大に形成され、高度化されて行つたにすぎない。個人の自由と人権の平等とを等しくはらみながら、個人を超越する客観的なものの新しき原理がこれからさき国家学あるいは政治学の中に求められてゆくとしても、狭隘なる国家至上主義はいまや手あかによぐれ切つた古き概念の枠を超え、世界にばらまかれた無数の個人の上に立ちかえつてみる必要がありはしないか。古き価値は転換されねばならぬ。国家の枠を解体した側面から見られた、世界の中にバラバラに存在しつつ共通の権利と希いとをもち、かつそのために斗う新しき個人、もはや「世界市民」と公然と呼んでもいい個人、彼らは利己的集団としての古き「国家」の觀念をうち破るであろう。少くとも「国家」は新しい平面と価値とを獲得するであろう。そして、科学技術が国家的利己主義に結託しそれに奉仕し個人の——無数の個人の抹殺の具として使役され、その使用の残虐さによつて人間を戦慄と絶望にみちびくという最悪の陰惨な局面は打破されて人類の保全と進化との為に開放されるであろう。「国家」と「技術」との在り方は問題化しているのだと。ヘッセの真意はここにありはしないか。ともあれ、人びとがヘッ

セの言う「世界の核心」に立ちかえることは今日徒事ではないであろう。バラバラに死んで行く運命を担うがゆえに、例外なく無へ流されゆく可憐な仮象として孤独にも自由で愛惜すべく美しい人間の生成そのものの、その個我的真實の生に誠実であること、そのまた誠実さを相互に認め合うことから生れ出する相互の信頼感と善意と寛容、そしてそのなかにおける創造の競い、二十世紀後半の人間革命が目ざすべきはこれであろう。「『地上の平和』と善意の人々の友情とは吾々の最高の理想であることを止めぬであろう。人間の文化は動物的な衝動を、より精神的なものに高めることによつて、恥じらいによつて、想像力によつて、生れるのである。生が生きられる価値のあるものである」ということは、たとえなべての生の讃仰者が死にゆかざるを得ないにしても、あらゆる芸術の究極の内容であり慰藉なのだ。愛が憎悪よりも高いものであり、理解が怒りよりも高いものであり、平和が戦争よりも高貴なものであること、それを、この不幸な戦争が今こそ我々の胸の中に、以前吾々が感じたよりも一層深く灼きつけねばならぬ。もしそうでないならば戦争に何の甲斐があつたというのか」、(ibid. S.19—20)とヘッセは言っている。また「……おそらく私は再び詩人となり、妙好人 ein Frommer となり、一人の小児に帰るであろう、そして世界と世界史とは私にとってはもはや道德的問題としてではなく、永遠の神的なる遊戯(の世界) Schauspiel と絵本としてあらわれるであろう」と彼はフランクフルト市のゲーテ賞受賞に際してのべた。(Oct. 1963)

Text—Hermann Hesse : Krieg und Frieden Betrachtungen zu Krieg und Politik seit dem Jahr 1914

(Suhrkamp Verlag vorn S. Fischer)

Inhalt

Geleitwort

O Freunde, nicht diese Töne !

An einen Staatsminister

Wenn der Krieg noch zwei Jahre dauert

Weihnacht

Soll Friede werden ?

Wenn der Krieg noch fünf Jahre dauert

Der Europäer

Traum am Feierabend

Krieg und Frieden

Weltgeschichte

Das Reich

Der Weg der Liebe

Eigensinn

Zarathustras Wiederkehr

Brief an einen jungen Deutschen

Du sollst nicht töten

Chinesische Betrachtungen

Weltkrise und Bucher

Blatt aus dem Notizbuch

Schluß des Regi-Tagebuches

Ansprache in der ersten Stunde des Jahres 1946

Brief an Adele

Ein Brief nach Deutschland

Wort zum Bankett anlässlich der Nobel-Feier

Danksagung und moralisierende Betrachtung

An einen jungen Kollegen in Japan

Versuch einer Rechtfertigung zwei Briefe wegen Palästina

Über Romain Rolland

と P. Fechter : Geschichte der deutschen Literatur II (SM-Bücher)

を敬見した。

(September 1914)
(August 1917)
(Ende 1917)
(Dezember 1917)
(Dezember 1917)
(Anfang 1918)
(Januar 1918)
(März 1918)
(Sommer 1918)
(November 1918)
(Dezember 1918)
(Dezember 1918)
(1918)
(1919)
(1919)
(1919)
(1921)
(1937)
(1940)
(1945)
(1946)
(1946)